
私はダンジョン開発班に所属しております、【ガーゴイル】の『ピエール』でございます。

シークレット伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私はダンジョン開発班に所属しております、【ガーゴイル】の『ピエール』でございます。

【Nコード】

N9512U

【作者名】

シークレット伯爵

【あらすじ】

この魔王城には4つの班があった。

1つはダンジョン開発班。

1つは魔物育成班。

1つは魔王城整備班。

1つは魔物軍。

魔物たちはさまざまな仕事を平和にこなしていた。

これは魔物たちの仕事の物語。

プロローグ(前書き)

この話は私の趣味です。

どうぞお付き合いください。

シークレットワールドへあなたをよう招待！

プロローグ

この『魔王城』^{まおうじょう}には4つの班があります。

1つ目は『ダンジョン開発班』。

これは、勇者共の侵攻を妨げる^{また}『ダンジョン』の設計、建造を担当する班です。

2つ目は『魔物育成班』です。

この班では、ダンジョンに配置される『魔物』の世話などを担当します。

3つ目、『魔王城整備班』。

魔王城の点検、清掃をします。

4つ目は『魔物軍』です。

これは、ダンジョンに配置される魔物たちのことです。魔王城の中にある『ジム』に行ったり、魔物育成班にお世話になったりします。

彼らは勇者と戦うので人気の高い班となっております。

そして、この魔王城、これらの班を束ねられる唯一の存在が『大魔王クルシエル』様です。

初の【マンティコア】からの大魔王様です。

現在、第56代目でございます。

申し遅れました、私はダンジョン開発班に所属しております、【ガールゴイル】の『ピエール』でございます。

これから、ダンジョン開発班の仕組みを説明していきたいと思いません。

それぞれの班には班長がいます。

ダンジョン開発班の班長は半人半馬の獣人【ケンタウロス】の『マルコ』様です。

マルコ様は我々のような立場の低い班員に優しく接してくれます。

マルコ様は第57代目魔王候補でございます。

そんなマルコ様が開発したダンジョンは今までで10組のパーティーを全滅させました。

班長の説明はこんなところでいいでしょう。

次、『隊編成』でございます。

それぞれの班には隊のというものが存在します。

ダンジョン開発班の場合ですと、A隊〜D隊までございます。

A隊は材料の調達をします。

B隊はダンジョンの設計をします。

C隊はダンジョンを建造します。

D隊はA〜C班に指示を出します。

ちなみにマルコ様はD隊の隊長もしてらっしゃいます。

私はD隊です。

隊編成の説明は以上です。

私たちはこんな感じで仕事をしております。

ブログ（後書き）

どうでしょうか？

感想、評価お願いします。

更新は『ゴブリンが魔王になる方法』と並行して連載してまいりますので、そちらを優先したいと思います。

2日に1回は更新したいです。

大魔王様設計の新ダンジョンを造ります。(前書き)

サブタイトルのとおりです

クルシエルの設計するダンジョンを造ります。

大魔王様設計の新ダンジョンを造ります。

私たちは大魔王様に招集をかけられました。

大魔王様は5mほどの大きな椅子にお座りになっておられました。白い椅子に黄色いラインがはいっており、大魔王様の紫色の毛並みがとてもこうごうしく目立っております。

「クルシエル様、なんでしょうか？」

マルコ様は大魔王様の前に膝をおつきになり、声を低くして訪ねられました。

「うむ、そろそろ3つ目のダンジョンを造る頃かと思ってな」

「かしこまりました。ならば『総司令官』を私にお任せください。必ず素晴らしいダンジョンを造ってみせましょう」

すると大魔王様は落ち着いてこうおっしゃいました。

「いや、今回は私がやろう。お前は通常の仕事につけ」

「は、はい……。わかりました」

「今回は7階のダンジョンだ。育成班は『ゴブリン部隊』と『オーク部隊』を中心に育てる。ボスには【ギガス】を使う。1番深緑なギガスを選べ」

このときの大魔王様はいつもと違い、とてもしっかりしていました。

「よし、話は以上だ。各々の持ち場に帰っていいぞ」

私たちは持ち場に帰りました。

ダンジョン開発班は魔王城を出て、近くにある森に行きました。森を歩いていると広場に出ました。

そこを地下に向かってC隊が掘り進めます。

今回は設計図を大魔王様がお作りになられたので、仕事のないB隊はC隊に加わりました。

「おーい、『ゴルド』！ こっちの森に来てくれ」

マルコ様は広場で作業してらっしゃる【ミノタウロス】のゴールド様をお呼びになりました。

「ちよつと待ってくれ、今行く」

ゴールド様はマルコ様のもとへ走りました。

広場ではBC隊が作業しています。

大魔王様設計の新ダンジョンを造ります。(後書き)

今回はとてもよくできました。

まだ評価0です(泣)。

評価お願いします。

とつやらマルコ様とゴルド様が話し合いをしているようです。

ゴルド様がマルコ様に尋ねました。

「なんだ？ 工事のことか？」

「今回はクルシエル様の設計だ。絶対に手を抜くな。」

「わかってるって。それより、今日の昼ご飯はなにか知ってるか？」

「いや、知らないけど……」

ゴルド様は目を星屑ほしくずのように光らせました。

100カラットの瞳でございました。

「干草だよ！ やったー！！ 久しぶりの干草だ！」

「」

「やっぱりお前、牛だな」

「え？」

その後、お2人はしばらく建造の事について話し合っておられました。

とじしちひるまろ様とじろろ様が話し合ひをこころみまひです。(後書き)

短めです。

新ダンジョン1階造りに取り掛かっております。(前書き)

更新遅くてすいません

新ダンジョン1階造りに取り掛かっております。

私たちはマルコ様とゴールド様がお話をされている間にもダンジョンを掘り進めていたり、『魔物部屋』を造っていたりしていました。魔物部屋は勇者共が必ず通らなければいけない道にある部屋でございます。

そこには強力な魔物を配置するのですが、今回の1階の魔物部屋の設計図には『ボスゴブリン』様を配置するように書かれてあります。

私はボスゴブリン様を呼びに2匹の『ドワーフ』と一緒に魔王城の中にある『森林部屋』まで行きました。

「ピエールさん、ボスゴブリン様って強いんですか？」

「はい、とつてもお強い方ですよ。ゴブリン族ながら大魔王様に認められている方ですから」

「へえ〜。どんな方なんだろう」

そんなことを言っているうちに森林部屋に着きました。

その扉は植物のツルなどが生い茂りとても開けられる状態ではありませんでした。

「うーん。どうしましょうか。あなたは魔法を使えますか？」

「炎の超低級魔法ならなんとか……。」

「お願いします。このツルを燃やしてください」

「行きます！ ハア！」

ドワーフが魔法を唱えるとツルがどんどん燃えてゆきあつという間に扉があらわになりました。

私は扉を3回ノックし、開けました。

そこには広大な森林が広がっておりました。

「ど、どなたかいらっしやいますか？ ボスゴブリン様が1階魔物部屋のボスに選ばれました」

森林の中からは返事が返ってきませんでした。

すると私たちの背後からこう声が聞こえました。

「その話、本当か！？ ボスゴブリンはオレだ」

そこには小柄で筋肉質な赤いゴブリンが立っていました。

目は鋭く、野ウサギ程度なら睨み殺せるような眼差しでした。

「本当です。一緒に新ダンジョンまで行きましょう」

「ついにゴブリンの時代がきたのか！」

「それならオレの仲間も連れて行くのか！ きっと役に立つぞ」

「そうでございますね。お願いします」

私はボスゴブリン様が連れてきた7匹のゴブリンとドワーフとで新ダンジョンに向かいました。

ダンジョン1階はほぼ完成していました。

あとはモンスターと宝箱、罾の配置だけでした。

ボスゴブリン様は目的地にたどり着くところ言いました。

「オレがボスゴブリンだ！ みんな、よろしくな！」

新ダンジョン1階造りに取り掛かっております。(後書き)

評価おねがいします

ダンジョンに欠かせないものは案外必要ないものだったりします。

マルコ様はボスゴブリン様を確認すると再び作業に取り掛かりました。

このダンジョンは地階へ繋がっているため魔物部屋は薄暗くどんよりとした空間でした。

それ故、たいまつを各部屋、廊下に設置しています。

しかし魔物の目はそれが必要ありません。

闇の中でも十分に見えます。

「マルコ様、何故たいまつを設置するのでしょうか？」

「ん、何故だ？ 我々魔物の目は闇の中も見渡せるというのに」

「クルシエル様にきいてくる。ここはお前に任せたぞ」

マルコ様はケンタウロスが故にとても足が速いです。

新ダンジョンから魔王城まで2？ほどですが、それを4、5分で走ります。

そしてマルコ様は魔王城までたどり着き、大魔王様のところへ行きました。

「お、どうした？ マルコよ」

「お尋ねしたいことがございまして」

「なんだ」

「何故、ダンジョンにたいまつを設置するのでしょうか？ 魔物たちは闇の中でもはっきりと目が見えます」

「当然だろう。だって、勇者たちが真っ暗だったら可哀そうじゃない？」

「！？」

大魔王ともある者が敵に情けをかける優しいひとというところもありません。

大魔王様はちよっぴり天然でございますね。

宝箱というものは何か意味があるのでしょうか？

マルコ様は魔王城を後にし、新ダンジョンに戻ってきました。たいまつの子を説明するところ言いました。

「よし、なかなかいい出来じゃないか」

「今回はクリシエル様の設計だからな！　いつものお前の設計とは全然違うからな」

「なんだとお！！」

「まあまあ、お二人とも落ち着いて。まだ宝箱の設置がすんでおりません」

「ああ、そうだったな。ゴールド、あとで決着をつけるぞ！」

「この馬野郎が、いつでも相手になつてやるよ」

「お前は牛野郎だろ」

「ハハハハハ」

「そういえば宝箱は何故設置するのでしょうか？　わざわざ勇者どもに武器やアイテムを与える必要なんてあるでしょうか？」

「違うんだよピエール、多くの宝箱のなかにミミックをしのばせるんだ」

「なるほど！！」

素朴な疑問が解決しました。
よかったです。

ゴールド様が予想外の罠を仕掛けました。

宝箱設置も無事に終わり、次は罠です。

これは非常に重要で、勇者の行動を足止めする役割を果たします。今回の罠設計はゴールド様が引き受けるそうです。

「ゴールド！ クルシエル様から罠が届いたぞ！ これを設置したらどうだ？」

「いや、必要ないさ」

「何故だ？ 何か良い罠でもあるのか？」

「ああ、そうさ。空腹である勇者たちが絶対に引つかかる罠ー」

「見せてくれー！」

「タララタツタラー！ 干し草罠」

出てきた罠は小鳥を捕まえるような仕掛けに、エサとして干し草を置いただけのものでした。

とても人間どもが引つかかるとは思えません。

「ピエール！！ 人間を連れてこい！」

「かしこまりました」

連れてきた人間に罠をチラつかせましたが、やはり見向きもしません。

それを見てゴールド様は怒りました。

「貴様！ 何故引つかからない！？」

「いや、だって干し草ですもん」

「ゴールド。クルシエル様の罠を使おう」

「そうだな」

異設置も無事に終わりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9512u/>

私はダンジョン開発班に所属しております、【ガーゴイル】の『ピエール』で

2011年9月11日10時46分発行